

■ 伝統的木造と現代的木造の違い

	伝統木造住宅	現代木造住宅
屋根	重い	軽い
柱	太い	細い
梁	長い	短い
壁	少ない	多い
固め	貫・胴差	筋違い
基礎	固定しない	固定する
接合方法	仕口・継手	柄と金物の併用
金物	使わない	多用する
材積	1立米/坪程度	2立米/坪程度
構造計画	経験と技量	マニュアル優先
寿命	100年以上	20～30年

■ トラブルにならない為に

再生工事は、住んでおられる住まいを調査しながら進めていく場合も多く、天井や壁をめくらずに調査しなければならないケースもあり、解体を開始しはじめて、大きな見積り変更が発生する場合があります。

その為にも、目の肥えた専門家でもって慎重に調査及び見積りが必要です。

あらゆるデータの蓄積や、素晴らしい職人の育成、そしてお客様との信頼関係の構築が何よりも求められます。



## A 邸

所在地	京都市		
工期	平成 13 年 5 月～平成 14 年 2 月		
工事種別	現地再生		
構造・規模	木造 2 階建	延面積	263.67 m <sup>2</sup>
主な仕上げ	外部	屋根：日本瓦葺、一部ガラス瓦葺	外壁：漆喰塗及び杉板
	内部	玄関	床：叩き土間
		居間	床：柴栗フローリング乱尺
		和室	床：畳
		縁側	床：桧縁甲板
			壁：土塗壁
			天井：杉板（古色）
			壁：土塗壁
			天井：杉板（古色）
			壁：土塗壁
			天井：杉板（古材）
			壁：土塗壁
			天井：杉板



A家は、京都市の西部の右京区に位置し、旧院村の庄屋をつとめた旧家です。切妻造、棧瓦葺の建物で、丈の低い中二階にむしこ窓を開き、正面入口の両脇に板壁を設ける建物で、その風格ある外観は地域の伝統的景観に大いに寄与しておりました。

内部は右半を土間、左半を居室とし、三室を二列に並べる間取りです。後世の改造が幾つか見られるが、基本的な躯体はよく継承され、特に座敷や土間まわりは、かつての趣をよく残し、土間の梁組は見応えがありました。



1 階平面図（再生後）



2 階平面図（再生後）

建築は、中二階の丈の低さ、入口両脇の板壁の経年、土間梁組の貫配置など古風な部分があり、18 世紀までさかのぼるかどうかはわかりませんが、近世紀の建物である可能性がありました。

経年による傷みや傾斜など若干認められるが、十分に修復可能な程度であり、再生活用されることが望ましい貴重な建物と判断し、今回、この築 200 年近い建物を再生して、建物北側の若夫婦住まいと渡り廊下でつなぎ、客間、居間、お母様のプライベート空間として機能させる為に考慮した事は、伝統的景観に寄与している外観部分の復元と、建築基準法レベルの耐震性能の確保および現代の生活様式にふさわしい快適な住空間を得ることが出来ました。

外観部分の復元は、玄関廻り及びむしこ窓廻りを中心に、できるだけ建築当初の復元に努めました。なくなっていた煙だし屋根も再生し、その中にはマスターファンを設置して室内空気環境の向上に寄与し、むしこ窓の内側には、建具を三重に仕込み、住環境の向上と伝統的外観の確保を両立しました。

耐震性能の確保は、建物を柱と梁だけにしてジャッキアップした後、鋼管地業及びコンクリートベタ基礎を施工して、木部の不良部分は取り替え及び部分修理をしました。



▲再生前建物外観



▲再生前建物内観



▲1 F 居間



▲2 F 多目的室



▲1 F 客間

軸組には、筋違及び耐力面材や耐力格子を全体にまんべんなく配置しました。

外部及び内部の仕上げはできるだけ従来から使用されている自然素材を使用するように心掛け、これから手入れをして住みつづける事により、最低 50 年の歳月、生活していただける建物として再生しました。

内部については、本座敷はそのまま再生して、縁側は造りなおし、座敷の北側は壁で仕切って、お母様のプライベート空間としております。土間部分は床を上げ、天井は設けず、小屋梁組を見せ、ガラス瓦により採光を確保しました。中二階部分は中央の高さが確保できる部分については、多目的空間として利用し、その他の部分は、通路や納戸として利用しました。

▼玄関及び控の間

